産業観光
きりゅう紀行 54

良質の帯を若い世代に きもの文化を後世に残す

荒川織物有限会社

荒川織物有限会社のノコギリ屋根工場は、木造、木壁、瓦葺きの２連で、白色とこげ茶色のツートンカラーが広沢地区において大きな存在感を示している。建物は昭和23年（1948）の創建当時のまま、現在も現役の工場として利用されている。

同社の歴史は古く、明治24年（1891）に能登から桐生に移住した初代が、各種帯製造業として創業した。当時のノコギリ屋根工場は４、５連ある大きなものだったという。戦時下、織機類は全て供出され、工場も解体された。戦後、現在の工場を再建し事業を再開、時代が平成に変わる頃には、ゆかた帯を主力商品として製造するようになり、市内の買継商を通し東京や京都の問屋に卸している。さらに10年ほど前からは、男物の帯である角帯に力を入れるようになった。角帯は、幅約10センチメートル前後、長さは約４メートルほどのもので、男性の和装においてもっとも用いられる帯である。同社では、帯の柄も日々探究しており、伝統的なモチーフはもちろん、竜や星型、幾何学模様といった若い世代に受け入れられるような図柄のデザインにも挑戦している。

現在、その若い感性と発想で、きもの文化を後世に伝えようと意気込むのが、同社の五代目となる荒川智毅氏。荒川氏は学生時代から繊維について学び家業を継いだ。伝統技術を継承する一方で、革新的なことにも積極的に取り組み、帯地を生地として見直すことでコースターやテーブルセンターに加工、桐生織物記念館で販売し評判を得ている。「桐生を訪れた観光客に、お土産として喜んでもらえれば」と話している。

●場所／桐生市広沢町4－1975－2
●電話／0277－54－1957